

丹後地域における良食味米生産のための生育パターンの解析

農林センター 丹後特産部

要旨

丹後地域における「コシヒカリ」の良食味米生産のための理想的な生育パターンは、初期分けつの増加が緩やかで、出穂期前後の葉色がやや薄い色で一定に保ち、総粒数が少なく、登熟歩合が高い収量構成要素であった。

成果の概要

丹後良食味米共励会における上位入賞者の水稻の生育状況を調査し、丹後地域における良食味米生産のための理想生育相を解析した。

初期の生育状況は、過繁茂にならないように田植え 30 日後で 250 本/m²、40 日後でも 300 本/m²未滿で推移することが望ましい(図 1)。

出穂期前後の葉色を SPAD 値で 30 ~ 35 程度に保ち、その後、出穂 20 日後以降はすみやかに低下させる施肥管理が特徴である(図 2)。

m²当たりの粒数を 26,000 ~ 27,000 粒程度、収量を平均 53kg/a (所内平均の 94 %程度)に抑え、粒生産効率と登熟を高めることが重要である(図 3)。

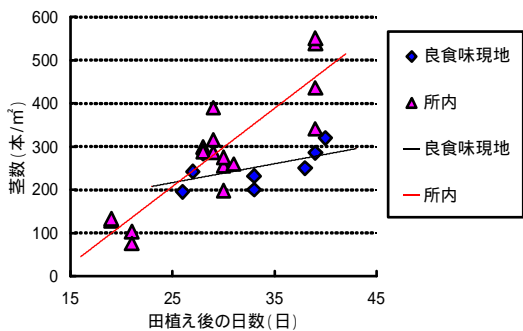


図1 茎数の増加

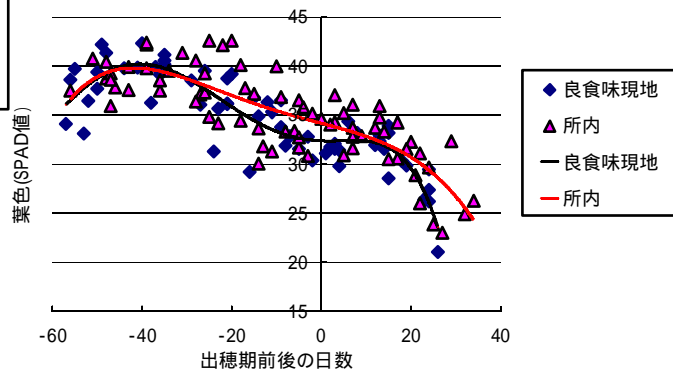


図2 葉色の推移

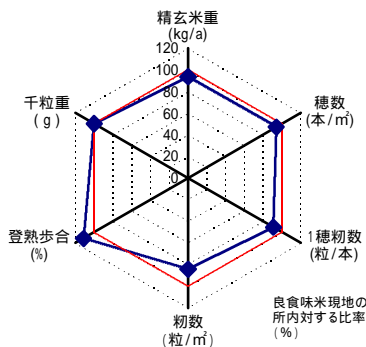


図3 収量および収量構成要素

(問合せ先：0772-65-2401)